
ヴェルデロードで牧場生活を

雨根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルデドラードで牧場生活を

【Nコード】

N3811Z

【作者名】

雨根

【あらすじ】

のほほん牧場オンライン『アクティブファーム』を満喫していた主人公。……って、いつの間にかリアル牧場に立ってマスヨ？ 原因も前後の記憶も状況もさっぱり。しかしどうやら腹は減る。なら仕方ない。悟った彼女はゲームの世界『ヴェルデドラード』の自分の牧場で、持ちキャラ『リコリス』として、ヘタレで性格の悪い相棒と、リアルなんだかゲームなんだかよく分からない牧場生活を開始する。*ゲームの仕様に沿った牧場生活になります。本当にリアルで専門的な内容にはなりません。

第1話 いっそ夢であれ

さやさやと気持ちのいい空気の中、彼女はぽかんと口を開けた。

目の前には青々とした葉を揺らす、見渡す限りの作物郡。その向こうの牧草地では牛がモーと鳴いていた。他にも羊や馬なんかも見える。

…なんて長閑な。じわじわと自覚を迫る緊張感さえなければ、暢気に動物たちと戯れていただろうに。

ぐるっと見回し、畑と牧草地の周囲に点在するいくつかの木造の建物は、今いる位置からは中を窺い知ることはできなかった。だがなんのための建物なのか、わざわざ確認しなくても理解している。

今目の前にある風景だけでも、ここがどこなのか十分に確定できてしまった。畑の広さ、牧草地とその向こうに流れる小川、建物の見た目と配置。見覚えがありすぎるほど見慣れた風景だから。

大きく深呼吸して、恐る恐る顔を後ろへ。肩越しに見えた、丸太で作られた小さな家。これまた見覚えがありすぎて困るソレは、他と同じ木造建築でありながら趣が違う。当然といえば当然で、こちらには人が暮らすための家なのだ。

暮らす、といっても中にあるのは本当に最低限の設備で、キッチンとテーブル、イス、棚と小さなベッドだけ。本当は色々と増築したり、物を増やしたりもできたのだが、金と手間を惜しんでやらなかった。

そう。やらなかったのだ。他でもない、彼女自身が。

この家の決定権は全て彼女にある。家だけでなく、目の前に広がる畑も、牧草地も、動物たちも、全て。

笑えない。だって、

「あはは。どう考えても私の牧場だよ……」

乾いた笑い声と青褪めた顔が、平和な牧場になんとも不似合いだった。

『アクティブファーム』というオンラインゲームがある。

名前の通り牧場経営をベースに、RPGやらシミュレーションやら各種ミニゲームやら色々詰め込んだゲームで、しかしクエストやイベントの発生条件、装備条件はほぼ全て牧場の発展に由来する。プレイヤーはヴェルデロードという世界で一人一牧場を与えられる。通常プレイヤーの牧場は世界MAPとは独立したエリアとされ、各町にあるワープポイントから入場する。もちろん他のプレイヤーの牧場に遊びに行くことも可能だった。冒険に繰り出すより、誰かの牧場でたむろしているプレイヤーの方が多かったかもしれない。

しかしアクティブファームは普通のMMOだった。

パソコンの前に座って3D画面の中のキャラクターを、マウスとキーボードで操作する。間違っても頭にVRとか付いたりしてVRMMOとか、そんな夢の溢れるスタイルではなく、ごくごく普通のMMOだったのだ。というかVRMMOなんてまだ誕生もしていない。それこそお話の中のこと。

それなのに。嗚呼、それなのに、だ。

今のこの有様っていったいどういう訳だろう。自信を持って自分の牧場だと断言できるこの場所に、彼女は立っている。……否、シヨックと混乱のあまり地面に両手をついているので、立ってはいないけど。

掌に触れる地面のざらざらした土の感触は本物で、視界に入ってくる髪は燃えるように赤かった。

(あ、ヤバイ、なんか変な汗出てきた)

ガクガクと震える身体を叱咤して、顔を上げてみる。何気なく、すぐ目の前に植わっている苗に視線を置くと、ぺろん、と上に文字が出た。

「?!」

ぎょっとした。

現実そのものの植物の見た目に、あまりにも不釣り合いなデジタル文字。集中してみれば、

『

トマト

レベル：100

成長率：30%

状態：健康

』

これまた、彼女にとっては非常に馴染みのある文字情報だった。本来なら、農作物や動物にカーソルを合わせると、自動で表示されるものだ。

彼女は虚ろな目を周囲に巡らせた。先ほどは軽く眺めただけだった景色の一つ一つを少し長めに見つめてみる。

牛、羊、馬。名前、レベル、年齢、状態。家畜小屋。鶏小屋。水車。従来のゲーム通りの名称や説明を見てから、少し考える。

正直ゲームと違って操作方法はさっぱりだったが、おそらくは。

「えーと……【ステータス】？」

ばさつと紙が広げられるような、それでいてなんとなく機械的な音がして、目の前に何かが躍り出た。

「おお……出た」

目の前に現れたソレは、羊皮紙をかたどった3Dグラフィックだった。並んでいる文字は、書かれているように見えて、実は紙の表面に浮いている。

トマト情報の時にも思ったが、リアルそのものの視界に、半透明で触れない画面が共存しているのは不思議な感じだと、若干逃避している彼女の頭は思った。近未来を描いた作品などでは一般的だが、現代に生きていて実物を目にするには多分ほとんどない。

羊皮紙には、こう書かれていた。

□

リコリス

レベル：1000
牧場レベル：1000

職業：妖精師

職業レベル：マスター

副業プリースト：神官

副業レベル：マスター

ボス名フェアリーロード：妖精王

以下略……

↳

ゲームのままのステータスを確認して、今も視界の端にちらつく赤い髪を摘まんで眺める。

クローズド 参加者特典、限定ヘアNo.8と呼ばれる髪型を真っ赤に設定して、その見た目からリコリスと名をつけた。ゲーム内でも名前の通ったキャラだった。間違いなく彼女がマウスとキーボードで動かしていたキャラだ。

そしてどうやら 今の、彼女自身であるらしい。

第2話 相棒がエンカウトしてきた！

リコリスは大きく息を吐いた。もう一度ゆっくりと吸って、吐いて。それから俯けていた顔を上げる。

「よし。考えても無駄だ」

わざわざ声に出したのは、自分に言い聞かせるためだった。

え？ 落ち着いてる？ 考えるのやめないと発狂しそうですがナニカ？

頭の中でよく分からない問答をしながら、リコリスは立ち上がった。膝についた砂をはたき落として、大きく伸びをして、また深呼吸。

とりあえず、家に入ろう。

色々と周囲を確認することに決め、彼女はまず生活の拠点となるであろう、『自宅』の扉を開けた。

「見事に何も無いなあ……分かってたけど」

外見も内装も素朴な木造建築だ。むしろ内装は素朴すぎるというか、質素というか……むしろ貧乏なの？ という有様だ。本当に最低限の設備しかない。そして狭い。

「まあ、貧乏は貧乏なんだけどね」

独り言が癖になりそうだと思う。だが喋っていないと頭が変になりそうなのだから、仕方がないではないか。

リコリスは狭い室内を横切って、部屋の隅にある簡素な寝台に腰を下ろした。何故か落ち着くのは、多分気の迷いだ。

寝台横にあったエンドテーブルの上に、鏡があった。キャラクター及び牧場作成記念に与えられる、最低限の家具一式の中のひとつだ。

手にとって、覗き込んだそこに映りこんだのは、ある意味予想通り、ある意味予想外の姿だった。

特徴的な真っ赤な髪は艶々と見事なキューティクルで、病的ではなく化粧もしていないのに白い肌。髪と同じ色の長い睫に縁取られた大きな目は緑色で、髪によく映えている。

キャラ作成した本人だ。特徴など改めて確認するまでもない、はずだった、のに。

「なんだこの美少女……」

ゲームで見慣れたと思っていた顔は、本物になると全く違って見えた。

要はキャラクターの特徴を丸ごと引き継いだ本物の人間なのだ。確かにゲームのキャラクターそのもの見た目であつたら、それはそれで不気味だが、逆にここまで美形にされると正直きつい。

そりゃ、美形は目の保養だし、美少女も大好きだ。リコリスだって、綺麗になりたいと思つたことくらいある。

しかし、持つて生まれた美貌でなく、努力で掴んだ美しさでなく、こういう状況で眩いばかりの美少女になりました、というのはなんというか……居た堪れない。そう。居た堪れないのだ。分かつてもらえるだろうか。無理！

リコリスは力なくベッドに倒れこんだ。鏡は適当に枕元にポイ。ぼへつと天井を見るともなしに見て、考える。これからのことを。

こうなってしまった原因はもちろん気になるが、今のところ完璧なノーヒント状態で、どうしようもない。

それよりもまず、目先のこと。

精神的ダメージによるところが大きい疲労感に、時間の経過と共にじわじわ来ている空腹感。作り物ではない。

ゲームと現実の混ざり合ったような周囲に、リコリスが設定したキャラクターの見た目で、本来の彼女ではなくても、この身体は本物なのだ。

それは、死にたくないなら、生きていくことを考えるべきだということ。

幸い、ゲームでリコリスが所有していた牧場はそのままのようだ。作物情報が表示されてはいたが、見た感じ、あのトマトは食べられる。後で齧ってみよう。

「……………知ってる人とか、いないかな」

警沢を言えばプレイヤー。同じようにこの意味の分からない状況にはまっている人がいてくれたなら。

そこまで考えて、思い至る。

「そうだ。【フレンド】！」

思わず大きく響いた声に伝えて、羊皮紙が広がる。先ほどのステータスと似ているが、こちらはフレンドリスト。ゲーム中、ログイン状態の相手は名前の前に花がつくのだ。

だが、期待を込めて上から下まで眺めても、花を咲かせた名前はひとつもなかった。もしかしたらフレンドシステムが機能していないだけかもしれない。あるいは、フレンド登録していないプレイヤー

ーなら同じ世界にいるかも。

どちらにせよ連絡を取り合う術はないが、全く希望を捨てる必要はない。リコリスは、必死に自分に言い聞かせる。

プレイヤーがダメなら、NPCはどうだろう。

ゲームの状態がどこまで反映されているか分からないが、リコリスの記憶通りなら、彼女の牧場は一般的なプレイヤー牧場と違い、独立エリアではなく世界マップに存在している。そしてそこは、ひとつの町のすぐ南の土地だった。つまり牧場を出て少し行けば、町があり、NPC 人がいることになる。

……いや、むしろいてくれないと困る。非常に困る。

知っている人がいないだけなら残念で済みますこともできるが、誰もいないのは大問題だ。遭難。無人島生活。いくらなんでも心が折れるわ。

(町に行ってみようか？ でも怖いな)

ごろごろとベッドの上を左右に転がって、リコリスは悩んだ。状況が普通でないだけに、かなり怖い。

知っているNPCがいるだろうか。いたとして、相手はリコリスをどう認識しているだろう。

『アクティブファーム』には、牧場以外にもうひとつ大きな特徴がある。それはNPCの数と個性だ。

世界中に散っている彼らは、名前を持ち、個性があり、過去が設定されている。ついでに大量のクエストを発生させてくれるものだから、必然、プレイヤーたちと深く関わっているのだ。

リコリスからすると、近くの町『スイエル』の住人たちは皆、名前も性格も知り尽くしたなじみの人々。だが、彼らが生身で生活し

ている現実には、いきなり入っていける自信がちよつとない。
できたらもう少し、小規模な感じで、そつと様子を伺ってみる感
じがベストなのだけれども。

「あ」

ひとり。

ひとりだけ、頼ってもいいかもしれないと思える人物がいる。

存在しているだろうか。リコリスのことを知っているだろうか。
相手はスイエルの町には住んでいない。牧場の近くの森の中に、
小さな家を構えている。

こつそり様子を見に行くのはどうだろう。

いい考えに思えて、リコリスは勢いよく体を起こした。と、
ほぼ同時に。

扉が吹き飛んだ。

「……っ?!」

盛大な破壊音と衝撃に、小さな家がびりびりと振動する。ついで
に鼓膜も心臓も揺れる揺れる。扉の破片がぱらぱらと足元まで転が
ってくるが、驚きすぎて声も出ない。

音の原因は探すまでもなかった。

視線の先、それまで扉があったところに、男が立っていたから。

リコリスと同じ真っ赤な髪の方は、息を切らせて、切ないような思いつめたような顔をしていた。言葉にならない何か、形のいい唇を震わせている。

これまた結構な美形だったが、それよりもその暗褐色の瞳から、彼女は視線を外せなかった。音にならなかった言葉の代わりとでもいうように、形容しがたい想いが暗い焔になって揺らぐ。

見ているだけで、ざわざわと胸のうちが騒ぐようなそれを、リコリスは知っていた。実際に、実物として目にしたのは初めてでも。

「ライカ」

零れ落ちたのは男の名前。正式にはライカリス・オルジエノヴァ。彼はこのゲームの、リコリスにとって最も重要な、NPCだった。そして、こっそり覗きにしようとした相手。

向こうから訪ねてくれたのはある意味好都合……な訳がない。無残な扉が、リコリスの顔を引き攣らせる。ただでさえ物の少ない家なのに、扉さえなくなるとかどうなの。

名を呼ばれたのをきっかけにして、固まっていたライカリスの表情が動いた。泣きそうな顔のまま、花が咲くような嬉しそうな笑みを浮かべる。それはもう、蟲惑的といっていいほど艶めて見えて、リコリスは思わず息を詰めた。

「リコ……!」

叫ぶように呼ばれたりコリスが答える前に、視界が塞がれた。走り寄ってきた彼が、勢いもそのままに抱きついてきたのだ。すっぽりと抱きこまれて彼女は呻く。

「ぐええ」

力が強すぎる。何しろ、木の扉を弾き飛ばした腕力だ。

(……死ぬ死ぬ)

色気のない呻き声がりコリスの口から漏れたのに、抱きしめてくる腕は全く緩まない。仕方なく、腕を回して背中を叩いた。手加減はしなかった。

「痛っ　痛いですよ、リコさん」

「私も痛いし苦しい！　圧死させる気?!」

「久しぶりに会ったのにひどいです」

人を食ったような言葉遣いと久しぶり、の言葉にはたと気づく。

これは、状況はともかく、親しい友人との会話だ。

『アクティブフォーム』のNPCには個々のプレイヤーに対して好感度が設定されていて、それはクエストやイベントなどで上下する。非常に非情にシビアな仕様だった。

好感度の上がり方はNPCそれぞれ違い、必要数値以上を稼ぐとパートナーとなる。狩りに同行してもらったり専用イベントがあったり、特殊アイテムが貰えたりと恩恵は大きい。パートナーはお互い1人だけ。

既に誰かのパートナー設定されたNPCでは、一定数値までしか好感度を稼げない。また、パートナーを得たプレイヤーは、他のN

PCの好感度は同じく一定値まで。大体目安として、『親しい友人』止まりだ。

ちなみにパートナーとの関係は親友、恋人などのメジャーなものから、養子縁組、師弟、マニアックなものならパトロン^{パパ}、女王様と奴隸、飼い主とペット……など、様々に特別な関係がある。

目の前のライカリスは、好感度を上げにくいことと性格と口が悪いことで有名だった。一応リコリスのパートナーで、彼女の親友。

ゲームで培った関係がそのまま延長されているなら、少しだけ安心できる……か？ 癖がありすぎて若干不安な気もするけど。

しかし孤独からは開放された。今までは画面の中だった相手が目の前にいて、しかもやたら親しいという状態に慣れなければならぬが、ひとりぼっちよりはずっといい。

締め付けていた腕の力も弱まって、色々ほつとほつと顔を上げたリコリスは、そこで目を丸くした。

「ちょ、な、なんで泣いてんの?！」

透明な雫がぱたぱた。顔を上げたリコリスの頬に落ちてくる。

ライカリスは微笑んだまま泣いていた。困ったように、でも嬉しそうに。

「えええ、似合わないすぎるでしょ」

「リコさんはひどすぎですよね」

「だって、あんたはもっとこう、ドライで意地悪で」

「……へえ」

対応に困って憎まれ口が口をつけば、潤んだ暗褐色の瞳に不穏な輝きが宿る。涙を流したままなのに、危険な感じがした。

それを認めて、リコリスは納得した。彼女の知っている、そのま
まのライカリスだ。

指先で涙を拭ってやると、ライカリスはため息をついて、その手
に顔をすり寄せた。

「……ずるい人だ」

甘えを多分に含んで零された言葉に、リコリスは笑った。実際に
誰かとこんなに親密にすることなど初めてなのに、平然としていら
れる自分が、とても不思議だった。

しかも、今までのお付き合いはゲームのプレイヤーとNPC、そ
れがなぜか生身で初対面したばかりという意味不明っぷり。なのに
ずっと一緒にいた親友同士のようなり取りができてしまうなんて
生きた人間として、大切な親友として、当たり前を受け入れつつ
ある自分の心の方に、リコリスは少し戸惑う。全然嫌じゃないし、
複雑だ。

ライカリスの目尻に残っていた一滴を拭いながら、思わずまじま
じと彼の顔を見つめる。

「あれ？」

扉吹き飛び事件と涙のインパクトのせいで気づくのが遅れたが、
記憶にあるゲームの画像よりも、大分頬がこけて見える。

リコリスとよく似た、でも彼女よりも少し暗めな赤い髪も、背中
の中ほどまであるそれを後ろで簡単に括っているのも、感情を強く
映す印象的な瞳も記憶のまま、特徴を引き継いでいるのに。ただで
さえ線が細かったのに、それに輪をかけて、その上顔色まで悪いっ
て。

リコリスは眉をひそめた。

「何か？」

ライカリスが薄く微笑んだまま訊ねてくる。涙はもう止まっていたが、その跡はまだ目元に残っていた。

「なんか痩せてない？」

「……………そうですね？」

妙な間があった。

怪訝な顔の頬を、指先でつついて、そのまま摘まむ。摘まむ肉があまりない。

「痩せたよね」

「いひやいれふ」

「っていうか、やつれた。ちゃんと食べてないの？」

これは気づかないふりができる範囲を超えている。心配くらい、させてもらう。

睨むリコリスの指を外させてから、ライカリスは肩を竦めた。

「死なずに動ける程度には食べてますよ」

なんだ、その微妙な返事は。

ライカ、と促せば目を逸らされた。

「……………2日に1回は食べてます」

「少なっ」

痩せるはずだ。

リコリスは目を丸くして、それから盛大に顔を顰めた。

「ダメでしょ、それは！ 倒れたらどうするのっ」

「倒れてませんし、平気ですよ」

答える声はため息まじりで、カチンとくる。

倒れてからでは遅いし、倒れてないから平気というものでもないだろうに。

「ああ、そう。確かに、人の家の扉吹っ飛ばすくらいには元気みただけどね」

扉を壊されたことは別に怒ってない。腹が立ったのはそのことではない。

皮肉っぽく言ったりリコリスにそっぽを向かれて、ライカリスは困った顔をする。

「怒らないで……リコ」

その、継るみたいな声と顔は反則だと思う。思うが、リコリスは腰に回っていた手を振り払って立ち上がった。

ライカリスはそれにひどく慌てた様子で彼女に手を伸ばした。

「い、行かないで」

私を置いていかないでください。そんなことを真つ青な顔で言う。先ほどの涙といい、今の怯え方といい、何があったらこうなるんだらう。

なんとなく不安になりながら、リコリスは伸ばされた手を掴んだ。

「置いてったりしないわよ。あんたも来るの」
「え……」

リコリスが歩き出すと、手を引かれたライカリスは素直についてきた。ぽかんと口を開けたまま。

迷いなく向かった先は外。

見渡す限り青々としている野菜のうち、最初に見たトマトの前で立ち止まる。ツヤツヤで綺麗なトマトだ。

リコリスは掴んでいた手を離し、目の前のトマトを2つちぎると、そのまま牧場の横を流れている川まで移動した。持っていたトマトをその水で簡単に洗い、片方を齧ってみる。

うん。食べられる。それも、すごく美味しい。

「はい」

黙ってついてきていた後ろの男に、もう片方のトマトを差し出す。差し出された方は、瞳に戸惑いを浮かべていた。

「とりあえず食べて。トマト好きだよね？」

「ええと……はい」

「畑にあるもの、好きなの好きなだけいっちゃって。まあ生野菜ばかりもアレだから、後でご飯も作るけど」

だから、ちゃんと食べて、と。伝わったかな。

(これでも心配してるんだってば)

丸々としたトマトが、ライカリスの手に移る。口をつけるのを見て、ほっとした。

「 美味しいです」

「 そう。それはいいんだけど、」

ほっとしたのも束の間。

「 ……なんでまた泣きそうなの？」

え、トマト美味しいよね？

第3話 異世界初日でまさかの……

明るい夏の空の下、空気の綺麗な森に囲まれた牧場はどこまでも長閑で。

それなのに川岸に並んで腰を下ろす2人の表情は硬い。

泣きそうになったライカリスを宥めて、リコリスは改めて彼から話を聞いていた。

「あなたが消えてから、この世界では2年が経っています」

2年前まではたくさんの牧場があり、管理する牧場主たちがいた。それがある日、突如として牧場主たちはいなくなり、彼らの牧場へのゲートは閉じて、リコリスのように世界マップに存在していた牧場は更地になったという。

突然、全て消えたのだと。

そう聞かされて、彼女は息を詰めた。

プレイヤーたちがこの世界にいない。それは、つまり。

顔を強張らせたリコリスに、ライカリスは静かに頷いた。

「世界中が大混乱に陥りました」

「そう、でしょうね……」

リコリスはこの世界のあり方を知っている。ゲームで遊ぶにあたって最初に目を通すストーリー、あるいはゲーム中で受ける説明で、故意に読み飛ばさなければ、目にする世界のルール。

この世界、ヴェルデロードに生きる人々が日々得る食糧の約80%を、プレイヤーたちの牧場が担っていること。

都市と都市を結ぶ転移装置やを動かすのが、牧場で生み出される生命力であること。

ただのゲームなら、それはあくまでも設定だ。プレイヤーが減ったからといってNPCたちは飢えたりしないし、転移装置も止まったりしない。

しかし、今いるこの世界がゲームの世界と同じルールで動いている、本物であったなら。生きた人々が暮らす実在するヴェルデロードだったとしたら。

「……」

難しい顔で黙り込んだリコリスに、抑揚のない声でライカリスは語る。

「世界はあなたたちが動かしていました。だから、人々は必死で探しました。でも僅かな手がかりすらないまま」

取り戻したいもの、取り戻そうとしたものの欠片すら掴めないまま、時は経つ。人々に残ったものは、彼らとの記憶と、直前に収穫されていた農作物だけ。

そして、当然ながらその作物も減っていく。深刻な食糧危機を目前にして、人々は生活を優先しなくてはならなくなった。牧場主たちを探す余裕などなくなってしまった。

今では他の都市のことはほとんど分からない。転移装置が止まったのと同時に、都市同士の連絡回路まで閉じてしまって、お互いの情報が手に入らないからだ。

更には、狩る者がいなくなったことでモンスターまで増え始めて、隣町すら遠い。移動どころか、自衛で手一杯だという。

「……………」

(あ、頭痛くなってきた)

なんだその、最悪な状態は。

どう考えても、リコリスひとり戻ったからといって、改善される規模ではない。

「スイエルの町はまだマシンな方です。クローグさんの農場があつて、海も森もあるので、他の都市より遥かに食料を得やすい。モンスターも弱いです。私などは身軽なので、もっと楽でしたね」

「町の周りのモンスター、狩ってくれてたの？」

「ええ、まあ」

スイエルの町は、ゲームでプレイヤーが最初に降り立つ町だ。チュートリアルの要素が強く、牧場について指南するためのNPC、クローグ爺さんが小さな農場を経営していた。海と森の恵みも豊富だ。田舎で娯楽の少ない町だったが、今回はそれが幸いしたらしい。しかもライカリスがいる。パートナーNPCはそのペアのプレイヤーとレベルが揃えられるため、彼のレベルは1000のはず。どう考えても初期マップにいる強さではないので、彼が動いてくれていたならきつと大丈夫。

他の都市にもパートナーNPCは大勢いるが、そのどれだけが、ライカリスのように町を守ってくれているだろう。

戦闘向けとなると全体の4分の1くらい。非戦闘NPCはパートナーであつてもレベルが存在せず戦えない。上位プレイヤーたちのパートナーは軒並み性格に難ありで、他人のために動くとは思えなかった。

リコリスは、彼女の仲間の廃人プレイヤーたちと、そのパートナ

―を思い出してみる。

(……うん、無理)

ぶつちやけた話、ライカリスがスイエルの町を守っていたというのが既に十分驚きだ。

「町の人は全員無事です。食べるものは多少減っているので節約はしているようですが、それ以外だと特に変わりはないはずです」

スイエルの町はリコリスにとって大切な町だ。ライカリスに勝る存在こそいないが、住人たちは皆友達だから。

「ありがとう」

心からの礼を述べたリコリスに、ライカリスは目を細める。

「いいえ。……あなたの大切な場所ですから」

「……………」

(すみません。すみません。失礼なこと考えてごめんなさい)

ゲームでのライカリスは人間嫌い、他人に対して氷の如しだったが、これではリコリスの方がよほど人でなしだ。罪悪感で胸が痛い。

「リコさん？」

「……なんでもない。ホントにありがとう、ライカ。……ごめんね」

「いいんですよ。多分、この人間嫌いが町を守ってるなんて驚きだ、とか思っているんですけど、謝らなくていいです。概ねその通

りなので」

返す言葉もございません。そして沈黙は肯定デス。バレバレですかそうですか。

ていうかそれ自分で言っちゃうってどうなの？

引き攣っているリコリスの顔を覗き込んで、ライカリスはいたずらっぽく笑う。

「あなたのことがなかったら、わざわざ動きません。他人なんて生きてても死んでてもどちらでもいいですからね」

はい。出ました人でなし発言。しかも超いい笑顔。

リコリスも笑い返す。

「よかった、私の知ってるライカだ」

さらば罪悪感。

思い返せばゲーム初期、こんな毒まみれの発言ばかり投げつけられて、何度心折れそうになったことか。懐かしい。

「あなたのそういう素直なところ、好きですよ」

「私はライカの素直じゃないところも好きだな」

「……」

「ふ、照れるな」

リコリスが笑顔全開で言ってやれば、ライカリスが口元を押さえ顔を背ける。その耳が赤いのを確認しつつ、彼女は追い討ちをかけた。

甘いぜ。こういうのは照れたほうが負けなんだ。

感じなくてもいい罪悪感に苦しめられた仕返しやっあたりをしておいて、目

の前の赤い頬を撫でる。「ずるい」とかなんとか聞こえてきたが、スルーで。

「で？　こんなにやつれちゃってるのは、食糧難のせい？　皆に食べ物分けてたとか」

でもライカリスは自分で狩りができるし、モンスターだって構わず食べてしまうから、こんなに痩せるのはおかしくないだろうか。

「ああ、いえ、それは　まあ、そんなところです」

言い淀んで、結局言葉を濁した。

リコリスもそれ以上の追求はしなかった。彼の瞳をまた、あの苦しくなるような光がよぎったから。それに。

（　ごめんね。私にはそんな資格、ない）

全部話せと、言える立場にない。言っていないこと、言えないことが多すぎる。

リコリスは大きく息を吐く。それから、不安そうに彼女を伺っているライカリスの肩を軽く叩いた。

「じゃあ、これからはちゃんと食べてよね。私が帰ってきたからには、スイエルの町の食糧難も解決だし？」

「え、あ、はい」

返事をしたライカリスに微笑んで、立ち上がって、大きく伸びをした。

「さあて。これから働くぞー！」

「……無理はしないでくださいね」
「倒れたら看病よろしく？」

ぼつりと言われた言葉には、遠まわしな返事で。と思ったら、視線がきつくなつた。

「リコ」

あ、怖い。

「ライカにだけは怒られたくないなあ、そんなに痩せて」
「リコ！」

怖いけど、過保護だね。

勢い込んで立ち上がったライカリスの切れ長な瞳が見下ろしてくる。

内心ちよつとヒヤヒヤしながら、その視線を挑発的に見つめ返した。

「じゃあ、ちゃんと生活するって約束しなさい」

「リ」

「しっかり食べて、危ないことはしないで、もっと自分を労わりなさい。心配させないで」

「あの」

「隠せて言ってるんじゃないからね？ ちよつとなら大丈夫とかでもないからね？」

リコリスの知らない2年間だけではない。ゲームであつた出来事も視野に入れて、問答無用で畳み掛ける。

そつだ。これはもう、ずっとずっと言っやりたかつた。この男

は自分に無頓着すぎる。

クエストでは要望に従って動くだけだったし、そもそも会話ができるわけでもなかったし。画面の中のキャラクターに怒っても仕方ないと思っていたが、しょっちゅう目の前で怪我をされるものだから、本当は悔しく悔しくて。

こうして目の前に生きている以上言っておかなければ。あんな調子で無茶をされたら、身がもたない。絶対胃がねじ切れる。

いいチャンスだから、言えるだけ言っておこう。

「たいした怪我じゃないとか、ちょっとくらい怪我しても平気だとか……私の方が平気じゃないの」

「わ、分かりましたから」

「ホントに分かった？ また繰り返すなら、私だって色々やっちゃうよ？ ひっくり返るまで働いたり、敵の大群に単騎特攻とかしてやるんだから」

「やめてくださいっ！」

堪りかねて叫ぶように言ったライカリスの目を真っ直ぐに見る。

「だったら。もっと自分を大事にするって約束しなさい」

「約束、します。しますから」

「ん、よし。なら私も無茶はしない」

満足したりコリスが頷くと、大きなため息が返ってきた。

「……本当にやめてくださいね。妖精師で特攻なんて自殺行為以外の何ものでもない」

(そりゃそうだ)

なんといつても、リコリスはメインの職業に妖精師、副業に神官フリーストを選んでいる。

双方共に防御が非常に低く、その2つが合わさると文句なしに紙である。ぺらっぺらだ。レベルが上がってもそれは変わらない。

そしてその上、単体火力も最低だ。攻撃魔法なんて1つだけという悲しさ。

狩りをする時など、MPの多さと回復魔法に物を言わせての持久戦だ。しかも雑魚相手に。

(1人ソロなら、ね)

「しないしない。ライカが約束守ってくれるならね。私の戦い方知ってるでしょ？」

「知ってますけど」

そう。極めてしまえば、妖精師には妖精師の戦い方ができる。

その光景を思い出したのか、ライカリスが微妙な顔をした。本気のリコリスの戦い方は実に独特なのだ。

「とにかく、約束しましたから。あなたも無理はしないで」

「うん、分かってる」

やっと少し安心できたのか、ライカリスは表情を緩めた。

「さ、戻ってご飯にしよう」

町の方も気になるけど、そこまで深刻な状況でないなら、ライカリスに食べさせるのが先だ。

その後は畑でありったけの作物を収穫して町に向かおうか。

(いや、でも。ライカこの顔色だし……休ませたいなあ)

町に行くといったら絶対ついてきそうだ。優先すべきは、

「リコさん」

「うん？」

色々考えていたら、後ろから静かな呼びかけがあって、腕を掴まれていた。リコリスは足を止めて振り返える。

「もう、どこにも行かないくださいね。私の隣に……いて、ください」

約束を求める声だった。

咄嗟に答えることができず、リコリスは沈黙する。

答えるの？ 答えていいの？ 答えられるの？

確かに、強く願うほど戻りたいと思っっているわけではない。戻りたい理由がない。

困ったことに、目の前の相棒の近くになら、いてもいいかもしれないと、思い始めてもいる。

でも。それでも。

何が原因で、どういった理由でここに来てしまったのか、分からない。

それは、いつまた、この世界から消えるか分からないということだ。

ライカリスを置いて。

(この人を置いて?)

腕を掴む大きな手が震えていることに気づいて、リコリスは唇を噛んだ。

「ライカ。私は牧場主たちが消えた理由が分からない」

「そんなの、私にだって……」

「そうだよ。だから、またいつ同じことが起きるか分からない、と思う」

「っ」

ライカの顔が歪む。歯を噛みしめて、きつく眉を寄せる。決壊は目前で。

掴まれた腕が痛い。感情が高ぶると、本当に手加減できないようだ。

「ずっとここにいるって、はっきりと断言はできない」

「……そんなの、嫌です」

「分かってる。だから……だからね、私の意志だけでいいなら。約束、するよ」

まさかの異世界初日で、永住の決断を迫られるとは思っていなかったけど。

我ながらなんて単純で流されやすい、とも思っけれども。

正直、相手が悪かった。勝てない。

「もし選択の余地があるなら、迷わずライカを選ぶから。許されるなら、ずっとライカのところにいるから。それだけは、約束」

「はい」

伏せた瞳から、一滴、ほろりと落ちた。

そんなライカリスの長い前髪をかき上げて、リコリスは顔を覗き込む。

「……やーい、泣き虫」

「なっ」

「ところでそろそろ腕放して。折れる」

長袖だから見えないけど、痣くらいできていそつだ。

途端に慌て出すライカリスを眺めながら、リコリスは決めた。

こつなったら意地でもここに残る方法を、あるいは確証を探しだす。

探して、必ず掴んでやろう。

第4話 巨大蝙蝠とトマトパスタ

「何を作ろうかな？」

小さなキッチンを前に、リコリスは腕まくりをした。ちなみに袖を捲くつた左腕には手の跡がくつきり。犯人は後ろで無意味にうろろしている。

確か調理台の下の棚に、器具一式が入っているはずだ。

家と家具はケチつたリコリスだが、調理器具はレア品を大量に揃えていた。

『アクティブフレーム』には「鍛冶」「革細工」「裁縫」「木工」「錬金」「料理」の6つの生産スキルがあり、この中から2つを選んで伸ばすことができる。

リコリスが選んだのは錬金と料理。故に調理器具にもレシピにも不自由しない。廃人らしく、集められるだけ集めてある。

リコリスはしゃがんで木製の戸に手をかけた。何も考えずに両開きのそれを開いて、

「……………」

パタン。

閉じた。

棚の中にあつたのは 否、棚の中は異空間だった。

棚の中は夜だった。見たこともない大きな満月が浮かんでいる。

その満月を背景にして、おどろおどろしい城が建ち、その周囲を無数の蝙蝠が飛んでいて、リコリスはその光景を見下ろしたのだ。棚はそんな謎の巨大異空間の上空に口を開けており、目当ての調理器具は、その前方を漂っていた。

何事だ。

「リコさん？ 何かありましたか？」
「な、なんでもない。何を作ろうかと思っただけ」

不思議そうに訊いてきたライカリスに、力なく首を振った。自分の家の棚に驚いているなんて、突っ込まれたら言い訳できない。リコリスはずっとこの家に住んでいたことになっているのだから。

それに実は、心当たりがある。

ゲーム中では、棚を開くとマスが並んでおり、アイテムアイコンを自分の持ち物から移動させて収めるシステムになっていた。おそらく、大抵のゲームでそうになっているだろう。

ただ、このゲームではその棚画面の背景画像を設定できるようになっていた。

リコリスがこのキッチン棚の背景に設定していたのが、ハロウィンイベントで配布された画像だった。大きな満月に、歪な城のシルエット、飛び交う蝙蝠……。

(そのせいかーっ)

謎は解けた。だがあえて言いたい。
何故こうなったし。

「何を作るんです？」

「ん〜。トマトのパスタとかどうかなあ」

レシピを所有しているはずだ。

冷蔵庫の中に入れていたアイテムを思い出しながら、リコリスは答える。食材は全てその中だ。

そちらにも色々入っていたはずだが……棚がこの様子だと、冷蔵庫の中もカオスな気がしてならない。

覚悟を決めて、もう一度棚を空ける。目の前に浮いている器具の中からお目当てを探しつつ、内心で少し焦る。この棚、使い方が分からない。

「ええと、麺を茹でるから【寸胴】でしょ」

言葉にすると、アイテム名に反応したのか、すすす、と中のひとつが近寄ってきた。

寸胴だ。

こうやって使うのか。便利といえば便利。

寸胴を引っ張り出しながら、リコリスは少し感動した。

「あと、【フライパン】、【片手鍋】、【包丁】、【スパゲティレードル】……【お玉】と【木ベラ】もかな」

こんなものだろうか。

近づいてきた物をひよいひよいと手にとって考えていると、ライカリスが隣から覗き込んできた。

「相変わらず前衛的な収納ですね」

「……でしょ？」

家主もドン引きするくらいにね。

でも、そうか。ライカリスはこの棚のことを知っているのか。そういえば、ゲーム中、何度も彼を連れて家に来ていたし、料理をしたこともある。知っていてもおかしくはない。誤魔化している本当に良かった。

「これ、下はどうなっているんですか？」

「さあ？」

こつちが訊きたい、そんなこと。

興味深げに身を乗り出すライカリスにハラハラする。どうなってる分らないだけに心配だ。落ちたらどうしよう。

彼の服の裾を握りながら、そこでふと、他の可能性に思い至った。

(あ、もしかしたら奥行きがあるっぽく描かれただけの絵だったりして)

蝙蝠が動いていたのも、動画だと思えば。

安心しかけた時、ライカリスが僅かに身じろいだ。

え、まさか落ちる？ ぎよつとして裾を握る手に力を込めると、彼は何事もなく上半身を戻して、次いで引き抜かれたその手には、黒い塊が。

「捕まえちゃいました」

やたらと大きな蝙蝠と、10センチの距離で目が合う。

大人しくしている蝙蝠は、よく見ると怯えているようだった。さすが野生動物。自分を捕らえた男が危険なことを、本能で察しているようだ。

小さいながらもつぶらな瞳が、助けを求めるようにリコリスを見ている。

「逃がしてあげなさい」
「はい」

当人もただ何となく捕まえてしまったのだろう。再び柵に腕を突っ込んで蝙蝠を緩く放り投げた。城の方へ飛んでいくのを、リコリスは見届けた。やっぱり本物なのか、この中。

「……」

まあ、いい。悩んでも仕方がない。今すべきは料理だ。
リコリスのスルースキルはわりと高い。

リコリスは調理台の前に立った。彼女の前には食材が並び、調理されるのを待っている。

冷蔵庫の中は、例によって異空間だったが、今は触れないでおこうか。

(ところでコレ、どうするの?)

このまま始めてしまってもいいのか。

調理台に向く視線に少し力を入れると、べろんと画面が表示された。レシピ一覧だった。リコリスが今まで集めた大量のレシピが載っている。

この中から目的のトマトパスタを探し出し、選択するとレシピ一覧が消えて、レシピが出てくる。

(……ん?)

表示させてからリコリスは気づいた。

そこにはやたらと詳しい手順が書いてあり、代わりに【開始】ボタンは存在しなかった。レシピは調理の邪魔にならない位置に浮いていて、とても見やすい。ということは。

(え、ガチで作れっこと?)

普通に料理しろと。道具と材料揃えて、開始ボタンをポチッとントントントンピコーンはどこ行った。

「何か手伝うことありますか?」

固まっていると、ライカリスが覗き込んでくる。はっとした。このままではいくらなんでも不審すぎる。

「あ、じゃあ食器お願い……」

取り忘れた皿とフォークを頼む。「はい」と返事をして棚の前にしゃがみこむライカリスを見下ろしながら、リコリスはため息をついた。

(いや、料理はできるよ。できるんだけどさあ)

料理はまだいい。しかし他の生産スキルはどうなる。裁縫とか、切ったり縫ったりして装備作るのか。

予想外の展開に戸惑いつつ、ベーコンに包丁を入れた。

今日ほど料理ができてよかったと思う日はない。

強いて言えば、彼氏を家に招待して初の手料理を振舞う状況に似ている。……ちょっと違うか親友だし。

リコリスは元々一人暮らしだったため、手際は悪くない。作ったことのないメニューだからレシピを見ながらになったものの、作業そのものはスムーズだった。

「美味しいですね、これ」

地味な木製テーブルに向かい合って座り、嬉しそうにパスタをついているライカリスを眺めて、リコリスは今心底ほっとしている。内緒だ。

「そう？　じゃあ、また忘れた頃に作ってあげる」

「忘れた頃なんですか」

「同じのばかりだと飽きない？　他にも色々作れるし」

そう言うと、ライカリスは嬉しそうに微笑んだ。

「色々作ってくれるんですね。……嬉しいな。楽しみです」

「う」

リコリスにとっては何気ない言葉だったが、ライカリスにとっては『これから』を約束するものだったらしい。

想いが真っ直ぐすぎて、照れる。

「っ、作るよ、たくさんね。ぼよんぼよんに肥えさせてやるんだか

ら

「いえ、それはちよつと」

ライカリスが苦笑した。

照れ隠しだと、バレているだろうか。いや、肥えさせるのは本気
なのだけどね。

「ガリガリよりぼつちやりの方が好きだなあ」

「えー……」

何やら本気で悩んでいる様子なおかしい。

こつそりと笑いながら、リコリスはぐいっとコップの中身を啣っ
た。中身はついさつき搾った牛乳だ。

ライカリスも食べ終わって、手を合わせている。

「ごちそうさまでした。あ。洗い物は私が」

「いや、ライカは休んで。そんな顔色で働かせるほど鬼じゃない
よ私」

しっかり食べて少しだけ顔色は良くなっているが、まだまだ。

食器を片付けようとするライカリスを、リコリスが止める。

「でも」

「後で畑の野菜収穫して町に行くから、その時に手伝ってよ。今は
休憩。ね？」

手伝わせるといっても、そんなに働かせるつもりはないのだが、
それは言わないでおく。

「……分かりました」

渋々頷かれる。

それでも食器は運んでくれるらしく、リコリスの分の皿も重ねられて流しに移った。

洗剤は流しとセットなのだろうか。思い返してみると、そんな装飾がついていた気もする。

皿をスポンジで擦りながら、リコリスは後ろに声をかけた。

「お昼寝しててもいいよ？」

「私が寝たらリコさん、どこかに行ったりしませんか」

「しないしない。誰かさんがまた泣いちゃったら困るし」

返事はない。言い返せなかったようだ。

洗い終わった食器を立てかけて、濡れた手をタオルで拭いながら振り向くと、いつの間にかベッドに移動していたライカリスが、リコリスを見ていた。

目が合うと、ぼんぼんと隣を叩かれる。

リコリスは肩を竦めて、その要望に従った。

「甘ったれ」

また返事はなく。

リコリスの肩に、そつと頭が乗せられる。さらさらと髪が流れた。何も言わないので、そのままにしておこう。

(この後の収穫は 妖精さんたち呼べるかな)

妖精師のリコリスは何種類かの妖精を呼んで使役できる。

その中に家妖精という種類がいて、戦闘には参加できないが、牧

場の仕事を指示しておけばやってくれる。牧場を見た限りではいなかった。未召喚状態で引っ込んでいるのだろうと思う。思いたい。妖精師なのに妖精が呼べないと、まさしく役立たずだ。

(収穫したら町に行つて、話を聞いて)

住人たちを思い浮かべる。

ライカリスのように、プレイヤーのパートナーだったNPCもいたはずだ。彼らはリコリスを見てどんな反応をするだろう。

(あと、扉を直さないといけないし、お風呂もなんとかしないと)

よく考えたら、最低限すらそろっていない、この家。

修理と増築諸々でいくらくらいかかるだろう。

確認しなくても知っている己の所持金。桁が少なすぎて覚えている。諸事情で貧乏街道まっしぐらのリコリスには頭の痛い状態だ。

覚悟の上の貧乏だったが、現状は予想外で溢れている。

作物を町の人々に売りつける気はないし、プレイヤー市場がないだけに稼ぐ場が限られてくる。オークションや露天システムで、いくらでも物を売り買いできたゲームとは違うのだから。

冒険者ギルドに依頼を受けに行くにも、スイエルの町に支部はないし、転移装置も動かないようだから難しい。

まさかこのレベルで必死の金策をする羽目になるとは……。

扉を直すくらいなら自分でもできるだろうが、お風呂は無理だ。

近所に天然温泉があるから、毎日そこまで通うしかないか。

悩むことしばし。不意に肩にかかる重みが増した。静かな呼吸音が聞こえてきて、ああ、とリコリスは納得する。

少し身体をずらすと、凭れかかってきていた上半身が彼女の前に落ちてくる。それを、頭が膝の上に来るようにそっと調整して、髪

を束ねる紐を解いた。

目は覚まसानかった。あまり熟睡できないのだと以前聞いたことがあるが、相当疲れていたのだろうか。

真っ直ぐで柔らかい髪を梳いてみる。

起きた時には、もう少し元気になってくれていたら嬉しい。

「おやすみ、ライカ」

第4話 巨大蝙蝠とトマトパスタ（後書き）

トマトパスタは、フレッシュトマトのアマトリチャーナのイメージです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811z/>

ヴェルデロードで牧場生活を

2011年12月18日10時51分発行